社会史を経た室町期権力論・支配体制論（上）

山田　徹

はじめに

ここ二〇年ほどの間における、室町期の諸権力や支配体制に関する研究の進展は著しい。公武関係史、幕府―守護体制論批判や、室町期荘園制論など、比較的わかりやすいトレンドのみならず、制度史研究や個別の地域権力研究も視野に入れるならば、その蓄積は実に多岐にわたるといわねばなるまい。筆者自身も、このうち室町幕府論や守護論、荘園制論などをめぐって、いくつかの研究をおこなってきた一人である(1)が、これらの分野では、批判するにしても、継承を意識するにしても、一九六〇～七〇年代頃に国家論や社会構造論のなかで蓄積された諸研究に向き合うことになるのが特徴である。そのようにして今では古典ともいえる諸研究と対峙しながら、さまざまな点が議論されているところである。

ところが、筆者自身がそうした古典的研究に向き合う際に、難しい問題と感じてきた点がある。それは、この一九六〇～七〇年代と近年の諸研究の中間部分――具体的には一九八〇～九〇年代を中心とする時期――を、どのように

位置づけるべきなのかという点である。

この間の日本中世史研究には、研究上の大きな転換があったと理解されており、そのような転換が強調される際に、「社会史」ということばが象徴的に用いられている。たとえば東島誠は、與那覇潤との対談のなかで、「中世史家は、社会史から距離を取っている人の仕事でも、明らかに社会史をくぐり抜けている感覚はあるんです」と述べており(2)、そのように社会史を経た国家論、社会史を経た政治史、という表現は周辺分野でもたびたびみられるところである(3)。

このように、一九八〇～九〇年代の前後の時期に何らかの変化があったこと自体は漠然と意識されており、それを「社会史」と表現することにもある程度の共通認識があるように思われる。また、そのような社会史を継承しようとする研究者による、すぐれた研究史整理の論考も存在している(4)。しかし、その一方で、その転換がどのような転換だったのか、その転換によって中世社会に関する見方がどのように変化したのか、現在の諸研究にとってどのような点が当然の前提となっているのか、などといった点について、どの程度共通理解があるかといわれると、心許ない部分があるように思われる。とくに、前述のように研究の進展著しい権力論や支配体制論の当事者たちの間において、かつての古典学説との視角の違いを説明する際にこの問題の系統的な整理は肝要となってくるはずだが、そのような議論が必ずしも十分におこなわれているとはいいがたいのが現状である。

背景としていくつかの問題が考えられるが、その一つとして挙げられるのが、ここでいわれる「社会史」という用語の難しさ、複雑さであろう。この用語は、以前から日本史研究でも使用されていたとはいえ、網野善彦が「近年、主に西洋史の側から、いままでの歴史学のあり方に対する反省と批判をふくめた新しい歴史学の方向として「社会

史」ということが強調され」[5]という認識を示しているように、どちらかというと西洋史の側から提起されて広まった語である[6]。ところが、そもそも西洋史側で示されている社会史の内実は必ずしも一様ではなく[7]、そのなかで最も重視されたアナール学派のなかでさえ、論者の立場はさまざまだったことが知られている[8]。そうしたなか、アナール学派の翻訳・紹介に尽力したフランス史の二宮宏之は、「社会史」とは「はみ出して行く」ものであり[9]、「どこまでも問いなおしを続けようとする歴史学」[10]であると主張しているが、だとすれば、歴史学のなかのどのような分野、ないし動向を指しているのか、漠然としているような面がある[11]。

もちろん筆者も、「社会史とは何だったのか」を追究すること自体が無意味だとはまったく考えておらず、とくに史学史を考えるにあたっては、むしろ非常に重要な問題だと考えている。しかし、少なくとも先述のような本稿の問題意識からすれば、この用語に関する各氏の定義を日本史・西洋史など各方面から集め、その最大公約数的な要素を抽出することではなく[12]、あくまで日本中世史における転換の様相を押さえることを起点とするべきなのであろう。

とはいえ、ここで対象をひとまず日本中世史研究に絞ってみても、難しい問題がある。たとえば、本人は「社会史」と分類されることに必ずしも積極的でなかったとはいえ[13]、この間の研究の牽引役として、網野善彦の名を挙げること自体は問題ないと思われる[14]が、この網野の学説には、農業民・非農業民の対比を強調する点や、「無縁」や遍歴の問題を基軸に通史を描く点などをめぐって異論も多く、これが全面的に受け入れられ、主流学説となっているわけではない[15]。網野の論考の重要性や、その影響の大きさを軽視できないのはいうまでもないが、それらのみをもってこの間の転換の全体像を説明することができるわけでもないのである。

この点は、網野とともにこの時期の社会史に関係し、そののちの研究への影響が大きいと目される笠松宏至・勝俣

鎮夫らについても同様である。近年の社会史研究の整理としては、笠松・勝俣らによる法慣習研究、習俗研究に社会史の本質をみてとるならば、そののちの研究に多大な影響がみてとれることを論じた清水克行のものがよく知られている[16]。たしかにこの清水の整理は重要で、後述のようにそこで述べられる内容には参考になる部分も多い[17]。ただ、筆者としては、この「社会史」という用語自体が本来もう少し広い範囲を指すものとして使用されていた[18]こと、そして後述していくように、もう少し広い分野で新しい研究動向が意識されており、それらが現在の諸研究にもさまざまなかたちで継承されていることなどが、気になってしまうところである。また、このようにこの前後における研究上の転換を、突出した特定の数名の論者の問題に限定する理解が広く定着していくことで、かえってそうした転換の影響が部分的にしか意識されず、過小に評価されてしまうのではないか、という危惧も抱いてしまうところである。やはり、先述のような問題意識に立つならば、網野善彦が一九八八年に

> 六〇年代にさまざまな形で行われていた模索、歴史学の「停滞」のなかで模索されてきた動きが、七〇年代に入っていろいろな形で表面化した。それがいまも多様な形をとりながら、全体として歴史学の潮流の一つになりつつある[19]

と発言したような日本中世史研究の「潮流」自体を、整理しつつなるべく包括的にとらえること、そしてそのようなゆるやかな転換の延長線上で、何がどのように変化していったのかを見定めることが必要となってくるのであろう。

そこで本稿では、室町期の権力論・支配体制論とは一見すると直接関係ないようにみえるこの時期の研究動向にまでまずは遡り、どのような動きが日本中世史の研究者たちに新しいと認識されていたのかを整理する。そして、そうした動向がどのように展開し、引き続く時期の諸研究に影響を与えていったのか、とくにどのような意味で日本中世

史研究の視角に変化をもたらしたのかを確認してみたい。そのうえで、現段階の室町期権力論・支配体制研究において、どのような点が当たり前の視点となっているのか、そのような新たな視点の獲得を経て、現在の研究がどのような意味でかつての古典学説とは異なるスタート地点に立っているのかなどについて、筆者の理解するところを示していければと考えている。

一　日本中世史研究における社会史の諸側面

一九七〇年代の日本中世史研究において、転換点が強く意識されるようになりつつあったことを示すものとしてよく知られているのが、『史学雑誌』の「一九七五年の歴史学界」（いわゆる「回顧と展望」、以下同じ。日本中世一）における網野善彦の、「日本中世史研究は、ゆるやかながら、たしかに一つの曲り角にさしかかりつつある」という文章だろう[20]。網野はそう述べながら、「新たな分野が積極的に切り開かれつつある」と述べ、具体的には被差別部落史、都市、天皇、法理・習俗、史料論などのテーマを挙げつつ、女性史の必要性にも言及している。

この文章において、網野は何がどう新しいのかという点を本質的に明示しているわけではないが、同様の発言は翌年の「一九七六年の歴史学界」（日本中世一）を担当した黒田俊雄にもみられ、それまでに重視されてきた社会構成史的な見方、もしくは国家史・人民闘争史などとは異なる観点での研究が進みつつあるという意識が、網野だけのものでなかったのは確実であろう[21]。

ただ、山本幸司も指摘するように[22]、こうした動向が「社会史」という言葉と結びつきながら実感されるのは少し

遅れる。「一九七九年の歴史学界」（日本中世四）で新井孝重が「広く「社会史」といわれる問題領域が近時ますます脚光をあびつつある」と述べたように、そして保立道久が一九八一年に歴史科学協議会の大会で「荘園制的身分配置と社会史研究の課題」という報告をおこなった際に、「すでに一種の流行になっていた」[23]と述べたように、それは一九八〇年前後のことのようである[24]。

この背景には、一九七八年六月に網野の『無縁・公界・楽　―日本中世の自由と平和―』が刊行されて、大きな議論を巻き起こしたこと[25]、一九七九年九月に『思想』六六九号誌上で「社会史」特集が組まれ、そこに収載された柴田三千雄・遅塚忠躬・二宮宏之の座談会の冒頭で、本書が阿部謹也『中世を旅する人々』・『刑吏の社会史』などとともに高く評価されつつ、「社会史」という文脈で位置づけられたこと[26]などがあるのであろう。ともかくもこののち、一九八〇年七月以降に「中世の罪と罰」というテーマで『ＵＰ』誌上に網野・石井・笠松・勝俣の四人の連載が発表されたこと[27]、同年一〇月に網野『日本中世の民衆像』、一九八一年四、五月に阿部・網野・石井と樺山紘一による座談会を書籍化した『中世の風景　上・下』、一九八二年六月に網野・阿部の対談集『対談　中世の再発見』が刊行されたこと[28]などもあって、いわゆる「社会史ブーム」が生じ、八〇年代に関連研究の隆盛をみるのである[29]。

さて、この前後の時期における日本中世史研究の展開をより広い視野から考えるにあたって重要なのは、「社会史」という用語が定着し、網野らの中心的役割が明確化してくる以前に、どのような研究動向が新しい動きとして理解されていたのかという点であろう。たとえば、黒田俊雄は先述の「一九七六年の歴史学界」において、『岩波講座日本歴史　中世三、四』に所収された四本の論文に注目しているが、そこで取り上げられたのは網野善彦「中世都市論」[30]、石井進「中世社会論」[31]のほか、横井清「民衆文化の形成」[32]、大山喬平「中世の身分制と国家」[33]の二論文であ

り、同じく中世三に含まれていた笠松宏至「中世の政治社会思想」、中世四に含まれていた勝俣鎮夫「戦国法」の二論文は、意外にも取り上げられていない[34]。また、石井進や入間田宣夫が、網野の『無縁・公界・楽』と並んで、同じく一九七八年に刊行された有斐閣の戸田芳実編『日本史　第二巻　中世一』を取り上げている[35]が、この戸田編著は比較的早い段階で「社会史」という用語を積極的に取り入れている点でも注目される。

結論からいえば、こうした諸氏をはじめとする、七〇年代後半に共時的にみえていた研究動向には、八〇年代以降につながる部分も多い。以下では、そうした点も見据えつつ、この時期の日本中世史における研究上の展開を、三つの要素に注目しつつ整理してみたい。

中世を生きた人びと　この時期に「社会史」と呼ばれた諸研究の特質として、まず第一に挙げられるのが、中世を生きたさまざまな人びと自体への関心である。

網野善彦が中世民衆への実像を解明することに腐心し、海民・鋳物師・芸能民などをはじめとするさまざまな人々を取り上げながら、遍歴する非農業民について徹底的にこだわったことはよく知られていよう。同じ頃に戸田芳実が「中世に生きる人びと」をリアルに知る途はないものかという思いは、研究者・教育者に共通するものだろう[36]と述べていること、入間田宣夫が「それにしても、イエ支配・自力救済・一味神水などの諸事象がわれわれに語りかけてくれる中世の人々の生きざまはなんと興味深いことか[37]と述べていることなども注目され、このように当時を生きた人々をリアルにとらえたいという関心は、広く共有されたものであった。

もちろん、このような人びとへの関心は、石母田正が『中世的世界の形成』を執筆するにあたって、「荘園の歴史は私にとって何よりもまず人間が生き、闘い、かくして歴史を形成してきた一箇の世界でなければならなかった」と

述べたように[38]、それ以前の日本中世史研究にも存在していた。階級闘争・人民闘争を重視した戦後のマルクス主義歴史学のなかでも、「農民」「人民」「民衆」といった言葉で一体的に表現してしまうにはあまりにも多様な人びとの実態を探究して描き出そうとするような動きはあり、少しずつ進展していたわけで、たとえば黒田俊雄が先の文脈で大山喬平論文に言及していることからも明らかなように、身分研究などもその一環として位置づけられる。もう少し広い意味では、女性史研究や、社会集団という視角[39]が重視されるようになりつつあったこととも、地続きの現象であったと考えてよかろう。

保立道久は、保立自身を含む当時の若手たちが「人民闘争史研究の自然な発展として」社会史研究に入っていくことができた[40]、という当事者としての実感を述べているが、このような中世を生きた人びと自体への関心が人民闘争史研究との連続面であり、新たな研究動向への入り口になりえていたこと、そしてそれが新たな研究を推進していく原動力となっていたことなどは、あえて強調しておきたいところである。

また、俗に「社会史ブーム」という場合、網野善彦と阿部謹也の対談は重要な要素だったと思われるが、それがまず接点を持ったのは、両者が遍歴するさまざまな身分の人びとに注目していた点が大きいように思われる[41]。一九七七年におこなわれたその対談の初回が、人類史全体に関わる議論を含む論点の多様さにもかかわらず「中世に生きる人々」との題を与えられたことにも、関心の原点が直截に示されているといってよいのではないだろうか[42]。

中世人の習俗　そのような当時を生きる人びとについて、それまで重視されてきた「闘争」以外の側面も含めて実態的に明らかにしていこう、というのが当時強調された点だったが、そこで第二に強調されるのが、清水克行が習俗ということばで切り取ろうとした問題群である。

清水はこの概念について、いったん「習俗（生活様式・生活意識・集合心性）」と表現しながらも、実際にはとくに勝俣鎮夫・笠松宏至の法慣習研究を中心にとらえているようである。たしかに、勝俣の「公界」や「楽」に関する研究が網野の『無縁・公界・楽』の前提にあったこと、一味神水や「篠を引く」など、対面的コミュニケーションのなかで相互に認知しうる「しぐさ」・行動様式の問題を勝俣が対象化した点に大きな意義があったこと、そのように慣習や法意識を次々に明らかにする勝俣・笠松両者の仕事が当時の社会史研究を牽引するものであり、とくに『中世の罪と罰』が「社会史ブーム」のなかで重要な役割を果たしたこと、そしてそのような研究手法が、戦国時代の村落の「作法」を次々に解明した藤木久志など(43)以後の研究にも継承されていったことなどは、間違いないところといえよう。

そういった点に関するまとめについては、清水がとくに強調するところなので言及を最低限にとどめ、ここでは習俗という用語がもう少し広い範囲のことを問題とするという点について、若干の確認・補足をおこなっておきたい。

一つは、一九七〇年代後半から八〇年代にかけての諸研究のなかで、たとえば黒田俊雄が社会史にあたるものを「民衆生活史」「〝社会生活史〟とでもいうべきもの」と表現し、その必要性を認めている(44)ように、習俗という用語でも表現できそうな諸要素が、「生活」という言葉で表現されることが多かった点である。七〇年代の著作では、「生活と文化との血のかよったつながりの究明を本命とし、生活に直結して育まれた文化現象の全体像を陽光のもとに引き出すことを目的とする」「生活文化史」を掲げた(45)横井清が、先にみた岩波講座の論文において、狂言などをも利用しながら、多彩な民衆文化の形成・発展の根が「民衆の日常生活のしくみ、習俗・信仰・伝承」にあること、労働生産に関わるものから性や暦などに至るまで、「日常の「生活」習俗、慣行の全面にわたる知恵の働き」が重要であ

ることなどを強調していることなども、よく知られていよう[46]。この横井について、社会史の先駆けとする評価もあること[47]、中井信彦が「日常的な生活過程」の重要性を論じつつ、そのような「習俗の次元」「日常性次元」の史的過程を社会史と概括したこと[48]などにも明白なように、こうした「生活」や「日常」といった側面を意識しつつ、社会史の称を使用するというのは、それなりに一般的なことであった[49]。

清水は、二〇〇七年における整理のなかでは、生活史的な社会史と習俗論を対比的にとらえるような表現もとっていて[50]、そのあたりには少しわかりづらい部分もあるが、二〇一五年には、「一定の土地で昔から行われている事柄や生活様式を表す概念」である「習俗」のほうが、「法慣習」よりも受け入れられやすいと判断して、あえてこの用語を選択したと明言している[51]。また、「年中行事や農事慣行・迷信などの風俗・風習」の問題とも切り離さずに論じるために、包括的な概念である「習俗」という概念を使用したいとも述べている。この認識であれば、「生活」という言葉を使用していた諸研究とも、それほど大きな矛盾や認識面の違いはないのであり、そう考えることで、網野がこだわっていた漁業・塩業をはじめとする技術史・生業史の問題[52]などとも、問題なく接続しうるものとして理解できるはずである。

このように「習俗」という用語の含意を広めに解釈したうえで、さらに加えておきたいのが、五感・感性の問題である。

たとえば、入間田宣夫・峰岸純夫・勝俣鎮夫・千々和到らの注目する一味神水[53]は、社会史の成果として有名な部類に属するといってよいだろうが、神前で盟約する人々全員が起請文に署判し、そしてその起請文を焼いた灰を水に混ぜ、その水（神水）を一同で飲むというその儀式については、その場で「鐘を突く」という行為や、「金打」とい

う行為、そして香を焚くことなども強調されている[54]。また、富沢清人が明らかにした検注の作法なども初期の社会史の成果とみなすべきだろうが[55]、ここでも検注取帳を「読み合う」という作業が強調されている。

このように、中世を生きた人びと自身の視点を重視し、ときに儀礼的に営まれる彼らの共同行為を検討する際には、同じ場に参加して、同じ音を聞いたり、同じものを見たりするという、いわば五感、感性の問題が必然的に問題になってくるのである。こうした問題については、「誓約の場」について論じた千々和到のほか、皮膚感覚や色彩のとらえかたを論じた黒田日出男らによって、そののち深められていくこととなる[56]。

以上の諸要素を列記すれば、中世を生きた人びとの、ものの見方・考え方・感じ方や、行動様式・技術・生業などということになる。「生活」ということでいえば、あるいはここに衣・食・住などの諸問題を付け加えることも可能であろう。ここでこれらの要素をあえて抽象化しておくならば、当時を生きていた人びと自身の視点を重視しつつ、彼らの眼前にあった諸要素、彼らにとって身の回りの、当たり前だった諸要素を対象としていくものといえるだろうか。

こうした関心については、よくいわれるように文化人類学・民族学や西洋史の社会史、そして民俗学などと対応する部分を容易にみいだすことができる[57]。もちろん、西洋史では人類学・民族学との対話を強調される[58]のに対し、日本中世史の側では民俗学の蓄積や、戦後歴史学内部の「内なるうながし」を強調する傾向が強い[59]点をはじめ、いくつか相違点が存在するのは事実である[60]。しかし、五感や贈与の問題のように、日本中世史研究が西洋史の社会史によって提示されたテーマを意識する面があったこと、両者の比較史的な対比に魅力が感じられていたことなどは、間違いないところであろう。そのため、とくに西洋史も含めて社会史が論じられる場合に、ここで整理したような諸

分野がその中心部分と理解されるのはよくわかるところである。

こうした諸分野については、西洋史におけるその後の研究を視野に入れるならば、文化人類学にならって「文化」という言葉で括ってしまうことも可能であり[61]、それによってあえて狭義の文化史で論じられてきたような諸論点を包摂し、またモノの問題などを組み込んでいったほうがよいようにも思われる[62]が、本稿の主要目的から大きく脱線してしまうため、今ここで踏み込むのはやめておきたい。

場・小世界　そして第三に、隠れたキーワードとして取り上げたいのが、「場」である。

この場という観点は、七〇年代に転換が認識され始めた頃から意識されており、たとえば、網野善彦が関渡津泊、市、宿、寺社の門前などを取り上げつつ、「都市的な場」「「無縁」の場」などと論じたこと[63]は有名だろう。さらにいえば石井進が、笠松・勝俣らの議論を引用して法や裁判権の分立を指摘し、イエ支配の自立性を強調しながら、改めて中世社会を分権的・多元的なものと描き出したことについても[64]、中世社会におけるさまざまな場の存在を先取りした側面があるといってよいかもしれない。

加えて注目したいのが、「社会史」という言葉を早い段階から使用していた戸田芳実編『日本史　第二巻　中世一』（有斐閣、一九七八年）の示す方向性である。戸田は、「できるだけ具体的な素材にそくして、歴史における「場」を重視する」という企画趣旨に則って、「社会史的考察に重点を定め」つつ、「ものと「場」を具体的に提示し、それを目の前にして読者を案内しながら歴史を語るようなスタイル」を取ることを宣言しており[65]、実際に本書では都市京都・鎌倉、荘園村落、寺院などに関する章を配しつつ、戸田自身も「東西交通」の章で「交通・輸送の「場」」たる港湾・道を取り上げている[66]。

先述のように入間田宣夫は、この戸田編著を網野の著作と並んで新しい研究動向を示すものと評価していたが[67]、そのときに入間田は、日本史研究会の一九七九年大会で村田修三「城跡調査と戦国史研究」、一九八〇年大会で戸田芳実「古道調査と中世史研究」、歴史学研究会の一九八〇年大会で服部英雄「変貌する耕地景観と荘園史研究」、一九八一年大会で千々和到「金石文からみた中世の東国」という報告がおこなわれたこと[68]にも注目し、「このような報告があいついで東・西の二大学会に登場するという事態はたしかに、これまでにはなかった画期的な出来事であったといわなければならない」と述べている[69]。これらの研究は、さまざまな手法によって城館・道・荘園などのさまざまな場、ないしはそれらを含み込む「地域」[70]を明らかにしようとするところに特徴があるわけだが、そのような点が新たな動きとして評価されているところに、この時期の動向がよくあらわれているといわねばなるまい[71]。このことを湯浅治久は、「歴史（学）における「場」の発見」と表現している[72]。

また、場の問題とは、先にみた習俗の問題とも密接に関わっている。先にみた一揆や検注の作法は、「この意志決定は、通常一揆成員が全員会合してなされる」[73]と述べられるように、まさにその場に参加し、互いの所作を見、互いの声を聞きながら進められる共同行為であったわけだが、そのような作法や共同行為を研究対象とする際には、場というものを意識せずにはいられなくなるのである。

たとえば、起請の問題をつきつめていった千々和到は、

鐘の音や誓言の声がおごそかに流れ、煙がたちのぼり、香ばしいかおりが充満し、つぎつぎに神水をのみかわす、つまり、神の意志と人の意志が通じあったことを、また、神がその場に臨んだことを、目で見、耳で聞き、鼻でかぎ、口で味わうことによって確認する、いわば、聴覚、視覚、嗅覚、触覚、味覚の、人間の五官全てが働

きかけを受けるような場

である「誓約の場」を「再発見」した[74]わけだが、このように中世人の視点・感覚を重視しつつ、ときに儀礼的に営まれる行為・行動、対面的コミュニケーションなどに関心を注いでいくほどに、彼らにとっての具体的な場の問題が重要となっていくのである。社会史の特徴を論じて鹿野政直が「空間」の問題を鋭く提示したように[75]、場や空間、そしてもう少し広くいえば、そうしたものを含む、彼らの生きていたフェイストゥフェイスのローカルな小世界――一部の論者が用いる用語を使うならば「生活世界」[76]ということになろうか――の問題は、社会史研究にとって必須の要素といってよいように思われる。

周知のように、こののち八〇年代から九〇年代にかけて、聞き取り調査、発掘調査、現地踏査、絵画史料や金石文の利用などといった諸手法を駆使し、隣接分野との共同をも当然の前提としつつ、都市・城館・荘園・街道などさまざまな場を具体的に描いていく研究が――網野や石井も関わりながら――大きく進展していくことになる。西洋史や人類学との関係において場や空間の問題が強調される際には象徴空間が強調されることが多い[77]のに対し、日本中世史研究においては、何よりもまず物理的、具体的な空間の研究自体が長足の進歩を遂げた点に特徴があるように思われるが、ともあれここでは、こういった諸研究が先にみてきたような人びとや習俗に関する研究と密接に関わりながら進展した点を、強調しておくこととしたい。

人びと・習俗・場　以上、本章では、一九七〇年代後半から八〇年代にかけて顕著にみられた日本中世史研究のなかの新動向について、人びと・習俗・場という三つのキーワードで整理してみた。もちろん、そのような視角を重視する研究者がそれ以前にも存在していたことを否定するつもりはないが、社会構成史や人民闘争史にかわって、こうし

た研究を進めることの価値が強く意識され、学際的で多様な手法を使用しつつその実践が大きく進んだ[78]点に、この時期の特徴をみいだすことは十分に可能であろう。

以上のような諸研究を、すべて社会史の枠内で理解するかどうかという点については、意見が分かれるはずである。たとえば、人びとへの関心とはあまりに当たり前のことで、とくに触れる必要がないとみなす立場もあるだろうし、場の具体的研究の進展は、アナール学派の社会史と必ずしも直接的に対応せず、しかも発掘調査の進展など、日本中世史研究に独自に作用した部分が強いこともあって、社会史に含めて考えないことのほうが多いかもしれない。

筆者としても、必要以上にこの呼称にこだわるつもりがあるわけではないが、たとえば石井進が社会史家として網野の研究の特色を取り上げた際、まず第一に

しばしば「非農業民」として一括される海の民、山の民、殺生を業とする人びと、交通と流通に関わる人びと、遍歴漂泊の職人たち、芸能に生きる人びと、聖などの宗教者や、かれらの集う場としての市場や都市、あるいは組織としての一揆・惣など、従来注目されなかった場や人びとに見事な照明をあてたこと

を挙げている[79]ことなどは注目される。人びと、場という問題設定は、少なくともその当初においてはともに社会史研究を構成する重要な要素とみなされえたようであり[80]、網野のいう「多様な形をとりながら」進みつつあった「潮流」を全体として見通そうとする際には、やはり言及しないわけにはいかない要素といえる。また、そのように考えることで、たとえば黒田俊雄が寺社勢力という社会集団に注目しつつ、とくに寺院について「俗縁のきずなを絶った」「〝個人〟の集団生活の場」であったとし、その「社会生活」を明らかにしようとしていたこと[81]など、直接には「社会史」と称しない動向も、同時代的な「潮流」の一環として把握できるようになるはずである[82]。

一方、逆になぜこれらの三つの要素に分解する必要があるのか、という疑問も生じるかもしれない。たしかに、人びと・習俗・場の三要素とは、ずれを含みながらも互いに密接に関わるものである。しかし、あえてそれでもこれらを分けたのは、この時期以降の研究の展開を長期的視野で考える際に、この三要素の関係が重要な意味をもつと考えたためである。

ここまで述べてきたように、人びとへの関心が社会史への「入り口」にあたり、そこから習俗や場というキーワードで説明される方向に研究が派生した。また、この二つの方向性は相互に密接なものであったが、習俗研究、すなわち共同行為やコミュニケーション、感性などに関する研究が進展するほどに、場の問題が必然的に浮上してくる、という関係にあったことも注目される。こうしたかたちで研究が展開することで、本来の出発点であった人びとという問題系列だけでは処理できない面が増大していくことになる。このことは以後の研究にとって非常に重要と考えられるが、そのあたりに関しては、章を改めて触れていくこととしたい。

なお、以下の叙述では表記の便宜上、本章で示した人びと・習俗・場という三つの視点について、第一・第二・第三の視角と略称する。

二　社会史以後の諸展開

よく指摘されるように、そののち『日本の社会史』シリーズ八巻（一九八六～八八年）が刊行された頃をピークに、「社会史」という語を冠することは次第に少なくなっていく[83]。これにより、「社会史は終わった」とする評価も

あるとのことだが、前章でみてきたような広い意味で一九七〇年代後半～八〇年代の研究の進展をとらえるならば、そのインパクトは多方面に及んだと評価される[84]。

たとえば二〇〇二年から二〇〇三年にかけて刊行された網野善彦・石井進編集の『日本の中世』シリーズにおいて、宗教者、商人・職人、女性・老人・子ども、都市における職能民などの活動に光を当てた巻がそれぞれ設定されていること[85]などは、先の第一の視角の延長線上にあると思われるが、そのような点に限らず、少なくともこのシリーズが刊行されたこの二〇〇〇年代（以下では叙述の便宜上、二〇〇〇年代という用語を二〇〇〇年からの一〇年間、すなわち二〇〇〇～二〇〇九年を指すものとして使用する）の初頭あたりまでは、一九七〇年代後半、もしくは八〇年代以降から直接的に連続する面が、わかりやすいかたちで数多く存在しているようにみうけられる[86]。

そうした諸分野には、女性史研究や被差別民研究などのように、当初から分野としてのまとまりが比較的はっきりしていたものがある一方で、村落論や景観論から災害史を経由し、のちに環境史に発展していく一連の動きのように、次から次に新たな分野が切り開かれていくようなこともあって、それらのすべてを本稿の限られた紙数のなかで追うことが不可能なのはいうまでもない。

冒頭にも掲げたように、本稿の目的は、こういった研究史上の転換が、現在の権力論や支配体制論にとってどのような意味で前提になっているのかを示す点にある。ここでは、そうした本稿の立場で必要と思われる点に絞って、それ以後の、一九九〇年代から二〇〇〇年代初頭あたりまでの動向を確認しておきたい。

支配者集団の社会史　先述の第二の視角の延長線上の展開、すなわち習俗・慣習という視角での研究の深化については清水克行のまとめがあるため深入りしないが、ここで強調しておきたいのが、そのような研究がどちらかというと

支配者にあたる人びとまでを射程に入れ始めたという点である。

周知のように、それ以前にも室町期研究においてはすでに二木謙一の儀礼・格式研究などがあった[87]が、本格的に社会史的な視角が意識されはじめたのは一九九〇年代の半ば、盛本昌広が室町殿を中心とした瓜の贈与を描き、金子拓・桜井英治の折紙銭研究が引き続いたあたりのことであろう[88]。金子はそののち御礼参賀や御成などの儀礼について実証を深め、桜井は贈与慣行に光を当てつつ、室町殿周辺の経済の問題を論じる方向へ研究を発展させていった[89]。桜井が二〇〇一年の『室町人の精神』において、室町期の特質をよくあらわすものとして酒宴の問題を取り上げたことなども注目されよう[90]。贈与や宴会といえば、まさに網野と阿部謹也の対談で話題になった内容だが、そのように当時の慣行を解明するという立場から、民衆だけでなく支配者たちの側も、当然のように対象になっていったわけである。

また、社会史の継承を掲げる清水克行が、「御所巻」や掠奪黙認などのような、室町幕府下で確認される慣習を鮮明に描き出したことも注目される[91]。本来、社会史といえば、民衆に対する関心を出発点にし、とくにマイノリティーに注目するような面がたしかにあったのだが、以上のように、人類学とも関係の深い贈与・儀礼・慣習などといったキーワードを介しつつ、支配者層を射程に入れる方向へと発展していったのである[92]。

そして、支配者層を射程に入れていくことで、京都という政権都市に所在する支配者たちの社会に視野が及んだ点も、注目されるところである。武士の都市的な側面については、院政期の武士論研究[93]や、鎌倉幕府の御家人研究[94]などによって順次議論が進んできたところであったが、室町期研究に関していえば、以上のような贈与・儀礼への注目によって結果的に照射されていった感が強い。

「二〇〇〇年の歴史学界」において金子拓は、「中世後期の社会・経済（一）」として、南北朝～戦国期の「洛中に集住した武家・公家の各社会集団について論じた論考、および彼ら社会集団が生活した都市京都、社会集団間の贈答、そこで生み出された文化・習俗を論じた論考」を一つの項目で取り上げている[95]。京都という政権都市に集住する武家関係者を公家廷臣たちと並記してしまうような感覚は、富田正弘の公武統一政権論とも関係する[96]ものと思われるが、それが以上のような研究進展の結果として登場している点は、きわめて興味深いところといわねばならない。

荘園・都市・地域社会　一方、さらにめざましい進展をみせたのが、先述の第三の視点、すなわち場の系列に属する成果である。

まず注目されるのは荘園調査だろう。一九八〇年代～九〇年代には、豊後国田染荘、丹波国大山荘、播磨国鵤荘、和泉国日根荘、播磨国大部荘などをはじめとするさまざまな地域で、地名や水利などに関する聞き取りをはじめとする荘園調査が進展した[97]。そうした調査の結果、水利や祭祀などの面で、荘園という枠組みが従来考えられていた以上に重要なものであったことが明らかにされる[98]とともに、荘園絵図研究[99]などとも関連しながら具体的な荘園内の空間復元も進んでいくこととなったのである[100]。

合わせて注目すべきなのが、都市研究である。「一九八一年の歴史学界」で石井進が鎌倉や草戸千軒・一乗谷に言及した頃から中世都市の考古学的成果への関心は次第に高まっていたが[101]、各地での発掘成果が次々に発見されていった八〇年代後半以降、さらに盛り上がりをみせることとなる[102]。とくに中世都市研究会が一九九三年以降に継続してシンポジウムを開催し、『中世都市研究』を刊行している点などはよく知られている。こうした考古学と文献史学

の共同により、都市内部の空間構成や、都市と周辺地域の関わりなどについて、各地の具体例にもとづいた議論が積み重ねられていった[103]。

このような諸研究の進展は、まさに石井が先取り的に描き出した「分権的・多元的構造」という説明に沿うように[104]、中世社会のなかに存在するさまざまな場の姿を、実態的に明らかにしていくものであったといえるだろうが、その結果、次に問題となってくるのは、そのように多元的に並存していた人間集団や場の、相互関係である。それらは、互いに孤立し、隔絶していたわけではない。酒井紀美が「中世村落の「あいだ」」を問題とし、「総体としての広域的な共同世界」を描き出そうとした[105]ように、それらがどのように相互に結びつけられて社会が構成されていたのかという点が、次の理論的な課題となってくるのである。

この問題への回答は、荘園研究・都市研究などの蓄積の上におこなわれた[106]。たとえば、荘園に領主の館や宗教施設など、核となる部分があることを指摘した「荘園には臍がある」という大山喬平の発言はよく知られていよう[107]。また、榎原雅治は、荘郷内の共同性を体現し、身分秩序の確認の場となっていた荘郷鎮守が、個別の荘・郷を越えるレベルで地域的なネットワークを形成していたことなど、重要な指摘をおこなっている[108]。

都市の位置づけも変化した。網野善彦の「都市的な場」論は、宿・市の建てられた河原・荒野や、関・泊・津・渡など、社会の各所に「都市的な場」が存在していたことを示すもので、のちの都市研究の出発点となる重要な指摘であったが、網野の理論のなかでこの「都市的な場」は、無縁論・非農業民論と関わって、どちらかというと境界的な性格が強調されていた。しかし、研究が進展することで、とくに「津・湊・泊」などと表現される港町や、「宿」が実質的に中世都市であること[109]、そしてそれらが地域のなかで、求心力をもち、中心的役割を果たしていたことが明

らかにされていく。それによって、「都市をもって地域の交通・コミュニケーションの中心地ととらえるのが、近年の学会の有力な傾向」となっていったのである[110]。

このような諸議論と並行しながら、戦略的に選択されていったのが地域社会という用語であった[111]。そのような方向性を決定づけたのは一九九五年に歴史学研究会日本中世史部会によって開催されたシンポジウム「日本中世の地域社会」[112]であったと思われるが、ここで同部会運営委員会ワーキンググループ（稲葉継陽・菊池浩幸・釈迦堂光浩・田中克行）による「「地域社会論」の視座と方法」のスタンスには注意が必要である。この論文において、「地域」は「複数の社会集団相互の形成する秩序によって統括される空間＝エリア」と表現され[113]、一見すると領域・空間の問題を対象化しようとしているようにもみえるが、同じ文章のなかで「村々の連合＝「地域」」としている箇所もあるように[114]、「地域」は事実上、社会集団論の延長線上に概念構成されているのである[115]。

しかし先述のように、実際に現実にこの時期に進展したのは、単純な社会集団論の延長ではなく、荘郷鎮守や寺院などの宗教施設、在地領主の館、市などを荘郷単位の中核、そして地方都市をより広い「地域」の中核と位置づけながら、それらの諸「地域」を相互に結ぶものとして、流通や人的・組織的ネットワークなどに注目する研究であった。前章の区分でいえば、第三の視角の延長線上に展開される地理的・空間的問題が現実的には大きな比重を占め、もはや不可欠の視角となっているのに対し、第一の視角に属する社会集団や諸主体の問題が引き続き重視されてはいるものの、相対的に比重を下げている点に特徴がある。人びとへの関心に始まり、彼らの習俗や感性に迫っていくなかで進展してきた社会史が、結果的に人びと（の集団）という問題系列の比重を低下させる方向へ作用した、という点は逆説的だが、この時期における日本中世史研究の展開を考えるうえで、きわめて重要な問題である。

そしてこのような研究動向が、流通史研究などに媒介されつつ、前項で取り上げたような政権都市の問題を取り上げ、支配者集団の集住する流通・消費の一大拠点として列島全体のなかにふたたび位置づけたとき、一旦多元の方向へ振り切ったかみえた中世社会像は、改めてひとつながりの構造を持つものとしてとらえなおされることとなる[116]。

二〇〇一年の日本史研究会大会で「首都論の創造」というテーマのシンポジウムがおこなわれた[117]ように、そうした問題意識は通時代的なものであったようだが、室町期研究でいえば、伊藤俊一・早島大祐・清水克行らが主に経済面から京都を中心とする求心構造の問題を相次いで取り上げた二〇〇三、〇四年頃が、このような一連の研究の流れの、一つの到達点であったといえるように思われる[118]。

荘園制論への再注目　このようにして中世社会を全体としてとらえる視座が再構築されていくなかで、浮上してきたのが荘園制の概念である。民衆の生活世界たる荘園や郷と、政権都市に所在する支配者たちの世界の双方を視野に入れ、それらを結びつける人・物の動きを重視するような視角とは、かつて黒田俊雄が「荘園制社会」、戸田芳実が「荘園体制」という用語で提示していた中世社会像と非常に親和的なものであり[119]、そのような視角が定着することで、荘園制概念が再び浮上してきたというのは、きわめて自然なことだったといわねばならない。

とくに、鎌倉幕府軍制と荘園制との関係を問うた高橋典幸の研究や、荘園制成立・展開史をめぐって中田薫・永原慶二以来の通説を問いなおした川端新・高橋一樹らの研究は大きな論点となった[120]が、室町期研究においては、この時代の社会をとらえる際に、荘園制概念が有用であることを確認するという方向で進展した。

このことを意義を説明するには、迂遠ではあるが、一九六〇～七〇年代の議論に若干遡っておく必要がある。

室町期の荘園制をめぐる議論のうち、一方の極にあるのが、南北朝内乱を境に荘園制が崩壊したとする見解であ

る。とくに永原慶二が、荘園制の本質を中央貴族による集団支配に求める立場を堅持しつつ、重層化した権益の体系、すなわち「職の体系」に注目し、その体系の頂点にある本家職が南北朝期に「全く生命を失った」ことを論じるかたちで、南北朝内乱の画期性を論じたことがよく知られている[121]。

一方、室町期にも荘園制的なあり方が存続していたという見解のほうも多数確認され、荘園領主の支配がこの時期に残存、再建されたことを強調する見解[122]、この時期の守護の支配が荘園制に依拠したものであったとする見解[123]、「公方年貢」を荘園体制社会の基軸としたうえで、戦国期にもそれが残存していたことを重視する見解[124]などが知られている。こうした動向を総合しつつ工藤敬一は、寺社本所領と並んで「武家領」を荘園制の構成要素としたうえで、中世前期とは異なるかたちで荘園制が再編成されたことを論じた[125]。とくに工藤が、守護が「一族家臣を管国内に配置する一方、惣領はじめ一族の中心部分は在京し、幕府内の枢要の位置を占め」ていたことに注目し、「都市的・貴族的領有」が「守護支配の中に亜流化されて生きつづける」ことを指摘している点は、（主に国衙の問題との関連から言及しているという点で限界があったとはいえ）その後の研究の進展を考えるうえで先駆的といえよう。

こうした一連の研究進展の結果、一見するとすでにこの段階で室町期の荘園制存続・再編が通説化したようにみえるかもしれないが、必ずしもそうではなかった。このようにして批判をおこなった諸氏のなかにも、荘園制を貴族や寺社による支配に事実上限定している論者も多く、在地領主制の発展を荘園制の枠外に位置づけるような理解は払拭されていない[126]。したがって、武家関係者の所領と化した荘・郷を荘園制の枠内で理解し、この時代を荘園制という観点から理解するような見方は、必ずしも通説にはなっていなかったのである。

ところが、先述のように中世史全体で荘園制概念が再評価されていくにつれ、そういった状況にも変化が訪れる。

とりわけ、一九九八～二〇〇〇年度におこなわれた国立歴史民俗博物館の共同研究「室町期荘園制の研究」は注目される。この共同研究の成果として二〇〇三年に刊行された報告書には、東国荘園も含めて荘園制が再編されたことを示した井原今朝男論文と、先行研究を的確に整理した伊藤俊一論文を筆頭に、注目すべき多くの個別事例研究が掲載されている[127]。

そして、さらに注目されるのが、この共同研究の関係者が前後する時期に発表した論考である。たとえば湯浅治久は、佐々木大原氏の近江国大原荘支配を描き出し、「武家領」も寺社本所領と内実が大きく変わるわけではない点を明示した[128]。また伊藤俊一は、「丹後国田数帳」を分析して在京武家領主の所領が大きな比率を占めていることを論じたうえで、金融業者による請負がみられるなど、そのような所領の経営が寺社本所領と大きく異なるわけではなかったことを指摘した[129]。

このほか、室町期にも本家としての地位が維持されていたことを強調する榎原雅治の指摘や、応永年間に多数の検注帳が作成されたことについての岡野友彦の指摘などもあり[130]、このような諸研究を通じて、先の工藤説を再評価し、荘園制が再編されるかたちで室町期にも継続していたという見方が、急速に定着することとなったのである[131]。

こうした荘園制論の隆盛は、広い意味では「戦後五〇年」を経て、戦後歴史学で論じられてきたさまざまな論点や概念に立ち戻って再考する動きの一つのあらわれであったといえようが、本稿で強調しておきたいのは、そのようななかでもとくにこの荘園制という概念が、比較的ストレートに再評価されたように思われることである。その背景にはやはり、荘園制を再評価するような研究が、一九八〇～九〇年代の研究の進展の自然な延長線上に立ち現れてきたものであったことが大きいように思われる。

以上のような流れを経て、以後はどちらかといえば、石井進が「集権的・求心的側面」と評価したような[132]側面に関する研究が進展することとなる。ただし、そのような研究動向も本稿で論及してきたような一連の研究動向を前提にするものであり、単純にかつての諸研究へと回帰するものではなかった。次章では、そのあたりについて整理してみることとしたい。

注

(1) 筆者が執筆した諸論考については、拙稿「室町時代の支配体制と列島諸地域」(『日本史研究』六三一、二〇一五年)にある程度まとめて示しているので、ここでは繰り返さない。

(2) 與那覇潤『歴史がおわるまえに』(亜紀書房、二〇一九年、初出二〇一二年)一三〇頁。ほか、東島誠「列島を二つに切り、歴史を二つに切ること」(『現代思想』四二―一九号、二〇一四年)。

(3) たとえば、西洋史を中心に歴史学の概説書を著した福井憲彦は、「現在では、社会史を経由したのちに、新たな射程において政治を捉え、国家のあり方を問うことが問題なのである」と述べる(福井『改訂新版　歴史学の現在』放送大学教育振興会、二〇〇一年、二〇頁)。また、日本近世史においても、福田千鶴が三宅正浩『近世大名家の政治秩序』(校倉書房、二〇一四年)の書評をおこなった際に、「評者が事件史(非日常・御家騒動)の分析を通じて政治秩序にアプローチしたのに対し、三宅氏は日常性の分析を通じて本書をまとめられたことに新鮮さを感じ、若い世代に社会史研究が着実に浸透していることを確信した」と述べている(福田「書評　三宅正浩著『近世大名家の政治秩序』」『日本史研究』六二九、二〇一五年、六三頁)。

(4) 日本中世史関連のものに限っても、保立道久「日本中世社会史研究の方法と展望」(『歴史評論』五〇〇、一九九一年)、清水克行「習俗論としての社会史」(『室町・戦国期研究を読みなおす』思文閣出版、二〇〇七年)・「日本中世「習俗」研究の現在」(『歴史評論』七七九、二〇一五年)、山本幸司「社会史の成果と課題」(『岩波講座日本歴史　第二二巻　歴史学の現

在』岩波書店、二〇一六年）などを挙げることができる。このほか、網野善彦関連のものは、『網野善彦著作集』（岩波書店、二〇〇七～二〇〇九年）の解説（稲葉伸道・桜井英治・盛本昌広・山本幸司執筆）をはじめとして数多い。

(5) 「いま日本史が面白い！」（『網野善彦対談集　二　多様な日本列島社会』岩波書店、二〇一五年、初出一九八七年）七二頁。

(6) 網野の最終講義「人類史の転換と歴史学」では、さらに絞り込んで「阿部謹也さんが言い出した」と述べられており（『網野善彦対談集　一　歴史観の転換』岩波書店、二〇一五年、初出一九九八年）、そのような認識であったことがわかる。

(7) ユルゲン・コッカ「社会史の概念と方法」（『思想』六六三、一九七九年）。

(8) 元来政治史・外交史中心の歴史学への批判から出発したアナール学派の、二〇世紀後半の論者たちの立場が多様だったことについては、イザベル・フランドワ編『「アナール」とは何か』（藤原書店、二〇〇三年）などによくあらわれている。

(9) 柴田三千雄・遅塚忠躬・二宮宏之「鼎談「社会史」を考える」（『歴史・文化・表象』岩波書店、一九九九年、初出一九七九年）。

(10) 『二宮宏之著作集　四　戦後歴史学と社会史』（岩波書店、二〇一一年）一六頁。

(11) 二宮自身は、たとえば提示されつつあるさまざまな問題群を、「からだ」と「こころ」という二つの軸を中心に、整理を試みている（「参照系としてのからだとこころ」『二宮宏之著作集　三　ソシアビリテと権力の社会史』岩波書店、二〇一一年、初出一九八八年）。

なお、網野と並んで同時期の社会史を牽引していた阿部謹也は「人間と人間の関係」を中心的な問題として取り上げており、比較的その定義はわかりやすいが、アナール学派の影響を受けたものではないと述べている点には注意が必要である（「歴史と叙述　あとがき」『阿部謹也著作集　第八巻　社会史とは何か　歴史と叙述』筑摩書房、二〇〇〇年、初出一九八五年、『阿部謹也自伝』新潮社、二〇〇五年、一九九頁）。また、阿部は「社会史研究は今のところ研究者それぞれが独自の形で営んでいるから、読者は特定の形を想定しえない」ものの、「私たち自身」「日本の社会」を問題にするという点に原点があることを強調している（「社会史とは何か」前掲『阿部謹也著作集　第八巻』、初出一九八八年）が、このような説明も、本文中で示した二宮の説明と並んで、社会史の本質をわかりにくくしているように思われる。

(12) この点については、石井進も「社会史の概念の詮索から出発することは困難であり、また賢明でもあるまい」（「社会史の課題」『石井進著作集　第六巻　中世社会論の地平』岩波書店、二〇〇五年、初出一九九五年、一三二頁）と述べている。

(13) 網野善彦・阿部謹也『対談　中世の再発見』（平凡社、一九九四年、初出一九八二年）二七三～二八一頁。

(14) 石井進は、網野が「社会史」というレッテルに違和感を表明している点にも注意を向けながら、「全体的に考えれば、やはり七〇年代以後の網野は社会史家とよぶのがもっともふさわしいであろう」と述べている（注(12)石井論文一三二頁）。

(15) 網野史学に関しては注(4)の著作集解説のほか、『網野史学の越え方』（ゆまに書房、二〇〇三年）、『年報中世史研究』三二号シンポジウム「中世史家・網野善彦　―原点の継承―」（二〇〇七年）、『現代思想　二〇一五年二月臨時増刊号　総特集網野善彦』（青土社、二〇一五年）、『歴史評論』八〇五号「特集　再考　網野善彦」（二〇一七年）など。

(16) 注(4)清水「習俗論としての社会史」。

(17) 後述する点以外で一つ気になるのは、石母田正の一九七三年の講演に注目しつつ、石母田がアナール学派の本格的紹介以前に社会史的な視角を有していたこと、その背景に佐藤進一・笠松宏至・勝俣鎮夫らとの交流があったことを論じる点である。もちろん、筆者も石母田が中世法の理解をめぐって、彼らの議論を多数取り入れたことを否定するつもりはないが、石母田が一九六五～六六年のヨーロッパ留学の際に、「ある時期からポリネシアなどについての民族学者の調査報告や研究論文を集中的に読んだ」ことはすでに指摘がある（吉田孝「解説」（『石母田正著作集　第四巻　古代国家論』岩波書店、一九八九年）二九八頁）。たしかに共編の書物もある石母田・佐藤間にそれ以前から知遇があったことは間違いないが、清水のいうように『中世政治社会思想』の編纂によって笠松や勝俣と接触があったのは、笠松によれば「昭和四〇年代半ば」、勝俣によれば「一九七〇年代のはじめ」である（笠松「『中世政治社会思想』の頃」『歴史評論』四三六、一九八六年、勝俣「三枚つづきの葉書」『石母田正著作集月報』五、一九八九年）。以上のような点を考慮すると、社会史にもつながる石母田の民族学・人類学的な視点をもっぱら佐藤・笠松・勝俣らに淵源するものとする説明には、若干違和感を感じるところである。

(18) 戸田芳実は、笠松らの研究について「「中世人の社会生活・政治生活の営みを、生きた規範の中で浮彫りにしていく「法の社会史」の研究」と表現しており（「一九八三年の歴史学界　日本中世一」『史学雑誌』九三―五、一九八四年）、あくまで社会史の一分野として理解しているようである。

(19) 「歴史叙述と方法」（注(6)『網野善彦対談集　一』、初出一九八八年）。

(20) 網野善彦「一九七五年の歴史学界　日本　中世一」（『史学雑誌』八五―五、一九七六年）。

(21) 黒田俊雄「一九七六年の歴史学界　日本　中世一」（『史学雑誌』八六―五、一九七七年）。黒田はこの文章のなかで、最近「賑やかな論題」となっていた国家史と民衆闘争史の業績が少なかったこと、従来の社会構成史の立場とは異なる手法によって研究が進展しつつあることを強調している。

(22) 注(4)山本論文。

(23) 注(4)保立論文。

(24) 黒田俊雄は一九八〇年七月に「現代歴史学の課題　―科学的歴史学は新しく発展できるか―」と題する報告をおこなったが、その報告を成稿しようとした際に、「一年ほどのあいだに歴史学をめぐる状況におもいのほか進展があって、当時の設問や展望のままでは、いまの状況にそぐわないように感じられた」とし、内容を大きく書き直している（「歴史学の再生と発展」『黒田俊雄著作集　第八巻　歴史学の思想と方法』法蔵館、一九九五年、初出一九八一年、一六七頁）。この「進展」について、具体的には「いわば〝社会史ムード〟ともいえるものが、ある程度確実に定着しつつあるとともに〝新しい波〟への不安や疑念も急速に減退したかにみえる」（同書一六八頁）と記しているが、これも社会史が急速に定着しつつあったことを示していよう。

(25) 網野善彦『無縁・公界・楽』（『網野善彦著作集　第一二巻　無縁・公界・楽』岩波書店、二〇〇七年、初出一九七八年）。「無縁・公界・楽」批判に対する網野の応答も、著作集の同巻に収録されている。

(26) 柴田三千雄・遅塚忠躬・二宮宏之「鼎談　「社会史」を考える」（『歴史・文化・表象』岩波書店、一九九九年、初出一九七九年）。

(27) のちにこの連載は討論などとともに網野善彦・石井進・笠松宏至・勝俣鎮夫『中世の罪と罰』（東京大学出版会、一九八三年）にまとめられた。

(28) 網野善彦『日本中世の民衆像』（『網野善彦著作集　第八巻　中世の民衆像』岩波書店、二〇〇九年、初出一九八〇年）、阿部謹也・網野・石井進・樺山紘一『中世の風景　上・下』（中央公論新社、一九八一年）、注(13)『対談　中世の再発見』。

(29) 大黒俊二は、このような動向をもたらした要因として、阿部謹也と網野善彦の「出会い」を誘導した平凡社をはじめとする出版社（の「目利きの編集者」）の役割を重視している（『ハーメルン』と『無縁』から『嘘と貪欲』へ」『日本史研究』七〇〇、二〇二〇年）。以上のほか、一九八二年には阿部謹也・川田順造・二宮宏之・良知力によって『社会史研究』が創刊

(40) 注(4)保立論文。

(39) 『石井進の世界　二　中世武士団』山川出版社、二〇〇五年、初出一九七四年）。このシリーズは、先に指摘した『岩波講座日本歴史』とともに「ちょうど第二期と第三期の過渡期に出されたという点で、いろいろな意味で面白い位置を占めています」と網野によって言及されている（『網野善彦著作集　第一八巻　歴史としての戦後史学』（岩波書店、二〇〇九年、初出一九九六年）、四三頁）。

(38) 『石母田正著作集　第五巻　中世的世界の形成』（岩波書店、一九八八年、初出一九四六年）一頁。なお、石母田のこの文章は、人びとへの関心を示すとともに、後述する場・小世界の問題ともつながっているものである。必ずしも民衆に関するものとは限らないが、一九七四～七五年に刊行された小学館の『日本の歴史』シリーズでは、各時代を代表するような社会集団を取り上げるという点を打ち出しており、中世では石井進『中世武士団』が刊行されていた（『石井進の世界　二　中世武士団』山川出版社、二〇〇五年、初出一九七四年）。このシリーズは、先に指摘した『岩波講座日本歴史』とともに「ちょうど第二期と第三期の過渡期に出されたという点で、いろいろな意味で面白い位置を占めています」と網野によって言及されている（『網野善彦著作集　第一八巻　歴史としての戦後史学』（岩波書店、二〇〇九年、初出一九九六年）、四三頁）。

(37) 注(35)入間田論文三四〇頁。

(36) 戸田芳実「初期中世史の見方」（『日本中世の民衆と領主』校倉書房、一九九四年、初出一九七八年）八頁。

(35) 戸田芳実編『日本史　第二巻　中世一』（有斐閣、一九七八年）。石井進「回顧と展望　一九七八年の歴史学界――日本　中世一」（『石井進の世界　六　中世史へのいざない』山川出版社、二〇〇六年、初出一九七九年）、入間田宣夫「中世史研究の新段階」（『新編　日本史研究入門』東京大学出版会、一九八二年）。

(34) 笠松宏至「中世の政治社会思想」（『日本中世法史論』東京大学出版会、一九七九年、初出一九七六年）。二論文とも、現在に至るまでの諸研究に多大な影響を与えている重要な論文であるだけに、黒田がこれらを新たな動向を示すものと理解していない点は非常に興味深く思われる。

(33) 大山喬平「中世の身分制と国家」（『日本中世農村史の研究』岩波書店、一九七八年、初出一九七六年）。

(32) 横井清「民衆文化の形成」（『岩波講座日本歴史　第七巻　中世三』岩波書店、一九七六年）。

(31) 石井進「中世社会論」（注(12)石井著書、初出一九七六年）。

(30) 網野善彦「中世都市論」（『網野善彦著作集　第一三巻　中世都市論』岩波書店、二〇〇七年、初出一九七六年）。

(41) さらにいえば、それが日本・西欧双方の差別の問題と関わっていた点も重要だろう。

(42) 「中世に生きる人々」（注(6)『網野善彦対談集　一』、初出一九七七年）。

(43) 藤木久志『戦国の作法』（平凡社、一九八七年、増補一九九八年）など。

(44) 黒田俊雄「転換期の歴史学」（注(24)黒田著書、初出一九七八年、一五八頁）、「法社会学と「社会史」」（同書、初出一九八九年、二八一頁）。黒田は、いわゆる社会史の動向とは距離を取って発言しているものの、「社会生活史的観点が不可欠となり、そういう研究とりわけ民衆生活史的なそれが、事実上要請されている」と述べているように、そのような研究の重要性について指摘している（「新しい歴史学」同書、初出一九八五年、二六〇頁）。

(45) 横井清『中世民衆の生活文化』（東京大学出版会、一九七五年）一六三頁。

(46) 注(32)横井論文。

(47) 赤坂憲雄は、「横井さんが果敢に切り開かれてきた、そうした中世民衆の世界像は、たぶん、狭い文献実証主義に閉じこもることなく、隣接の民俗学や国文学にもやわらかく開かれた歴史学であったという意味合いで、いわゆる社会史ブームの先駆けをなし、むしろもっとも社会史の名にふさわしいものであったかもしれない」と述べている（赤坂「横井史学の魅力」（横井『史話　中世を生きた人びと』福武書店、一九九一年））。また、今谷明も、注(45)横井『中世民衆の生活文化』を「日本史における「社会史ブーム」のはしり」としている（今谷『日本中世の謎に挑む』NTT出版、二〇〇一年、一二七頁）。

(48) 中井信彦『歴史学的方法の基準』（塙書房、一九七三年）。なお、本書は、日本史において「社会史」という用語が本稿で述べるような文脈で使用された比較的早い事例であると思われる。

(49) このほか、高橋昌明が「社会史が研究の対象に取り上げようとしている、具体的な人間活動・社会現象・日常生活の諸側面」「社会史が明らかにしようとしている、各種社会集団のあり方や民衆の生活や生活感情など」を「社会的生活過程」の問題と位置づけていること（高橋「社会史の位置と意義について」『中世史の理論と方法』校倉書房、一九九七年、初出一九八三年）など、同様の言及は多数確認できる。

(50) 注(4)清水「習俗論としての社会史」二二〇頁など。

(51) 注(4)清水「日本中世「習俗」研究の現在」一〇頁。なお、この「習俗」の定義は、法社会学者の加藤哲実によるものだということである。

(52) 技術史の分野も社会史の範疇でとらえられていたことについては、中世に限った企画ではないものの、永原慶二ほか編『講座　日本技術の社会史』（日本評論社、一九八三～八六年）が参考になる。農業・農産加工、塩業・漁業、紡織、窯業、採鉱と冶金、土木、建築、交通・運輸というテーマを掲げて、八巻にまとめられたシリーズである。網野はこのシリーズに三本の論考を寄せているが、これらを含む技術史・生業史に関する研究成果は『網野善彦著作集　第九巻　中世の生業と流通』（岩波書店、二〇〇八年）に収められている。

(53) 入間田宣夫「逃散の作法」・「中世国家と一揆」（『百姓申状と起請文の世界』東京大学出版会、一九八六年、初出一九八〇・一九八一年）、峰岸純夫「中世社会と一揆」（『中世社会の一揆と宗教』東京大学出版会、二〇〇八年、初出一九八一年）、勝俣鎮夫『一揆』（岩波書店、一九八二年）、千々和到「「誓約の場」の再発見」（『日本歴史』四二二、一九八三年）。

(54) 注(53)の諸論文・著書のほか、峰岸純夫「誓約の鐘」（注(53)峰岸著書、初出一九八二年）、石井進「徳政の鐘」（注(28)『中世の風景　下』）など。

(55) 富沢清人『中世荘園と検注』（吉川弘文館、一九九六年）。

(56) 黒田日出男『境界の中世　象徴の中世』（東京大学出版会、一九八六年）、注(53)千々和論文・「中世民衆的世界の秩序と抵抗」（『講座日本歴史四　中世二』東京大学出版会、一九八五年）・「中世日本の人びとと音」（『歴史学研究』六九一、一九九六年）。なお、酒井紀美が強調した「見る」「聞く」「話す」「触れる」などの「身体的な機能性」の問題も、この問題と深く関連しよう（酒井『中世のうわさ』吉川弘文館、一九九七年）。

(57) このような問題が同時代的に強く意識された背景として、注(4)清水「習俗論としての社会史」は「フランスの「現代思想」が日本に紹介されはじめたことで、レヴィ・ストロースに代表されるような構造人類学の手法が浸透していった」ことを指摘している。

(58) たとえば、ジャック・ルゴフは「民族学的歴史学」ないしは「人類学的歴史学」の立場を主張しつつ、日常的物質文化と習俗、身体と心性などの問題を取り上げており（ルゴフ「歴史学と民族学の現在」注(9)『歴史・文化・表象』、初出一九七六年）、二宮宏之は「過去のある時代、ある社会を、その深層において読みとっていこうとする」ことを課題とする「歴史人類学」の立場から、問題群を諸問題を「からだ」（生と死、疾病、性、衣食住、労働など）と「こころ」（五感、集合心性、時間意識、空間意識、コスモロジーなど）の二つの軸を中心に整理した（注(11)二宮論文）。注(11)に示したように阿部謹也は

アナール学派とは距離を置いている面があるが、「ヨーロッパ・原点への旅」（注⑾『阿部謹也著作集　第八巻』、初出一九八二年）や網野善彦との対談（注⑿『対談　中世の再発見』）に明らかなように、とくに贈与・互酬の問題について人類学から学んでいる。

(59) 注⑿石井論文など。

(60) 詳細に触れる余裕はないが、当時とくに注目されていたアナール学派との関係について、若干だけ触れておく。先述のように、アナール学派は伝統的歴史学のなかで正統的な位置を占めていた政治史に対抗しつつ形成されてきたもので、人間活動のあらゆる分野を含めて全体的に取り上げることを志向した（たとえば注⑼「鼎談「社会史」を考える」二一七～二一八頁など）。そうしたアナール学派の社会史は多様な側面をもつが、このうち日本中世史に最もインパクトを与えたのは、やはりここで挙げたように、この段階のジャック・ルゴフやエマニュエル・ル"ロワ"ラデュリが人類学との対話・交流を進めつつ提示していた諸テーマが、マルクス主義歴史学の社会構成史の影響が強かった日本の歴史学にとって、新鮮なものとして受け止められたという点が大きいだろう。

一方、アナール学派が「全体史」を主張することに対しての日本中世史の反応は消極的であるように見受けられ、この点の背景にはマルクス主義歴史学によって経済の問題を中心にある種の歴史の全体像を構築してきたという自負があったものと推察される。また、よくいわれるように、数量的手法（「系の歴史学」）の影響も中世史においては限定的で、このことを清水克行は史料的限界の問題として位置づけている（注⑷清水「習俗論としての社会史」）。興味深いのはフェルナン・ブローデルで、流通への着目、海を中心にとらえる視角、三つの時間軸を階層的に論じる視角など、日本中世史研究においても言及されることはあり、影響を与えた部分が確実にあるように思われるが、これらの点でブローデルが言及される際、必ずしも「社会史」という説明とともに引用されるわけではないように見受けられる。以上のようなアナール学派と日本史（とくにここでは日本中世史）側のズレという問題については、史学史的な観点からさらなる追究をおこなう余地が残されているように思われる。

(61) 近藤和彦は、文化という用語に、精神性と特殊性を重視する用法のほか、「文化人類学（社会人類学）におけるように、生活様式に深く根ざし日常行為に意味を与える枠組という面を強調した用法」があることを述べている（近藤「政治文化　何がどう問題か」『現代歴史学の成果と課題　一九八〇―二〇〇〇年Ⅱ　国家像・社会像の変貌』青木書店、二〇〇三年）。そ

のような広い意味での文化史の展開については、注(3)福井著書やピーター・バーク（長谷川貴彦訳）『増補改訂版　文化史とは何か』（法政大学出版局、初版二〇〇八年）なども参照。

(62) 実をいえば清水克行も、二〇〇七年に「習俗」という用語を本格的に提起する以前、二〇〇四年の著書では「人々の生活を律した法慣習や些細な日常の習俗」を「ひろい意味での〈文化〉」の問題としてとらえている（清水『室町社会の騒擾と秩序』吉川弘文館、二〇〇四年、一頁）。先述の横井清にも通じる部分といえるだろう。先に挙げた研究者のなかでは、横井清の言語感覚に近いだろうか。林屋辰三郎の薫陶を受けた横井は、民衆文化を考えるうえで芸能の問題も重視していた。

なお、社会史研究に先んじた蓄積としてよく言及される西岡虎之助が、地方文化、百姓文化に注目する「文化史研究」を進めていたことについては、『西岡虎之助著作集　第三、四巻　文化史の研究Ⅰ、Ⅱ』（三一書房、一九八四年・一九八七年）。

(63) この一九七六年の注(30)網野「中世都市論」において「都市的な場」として取り上げられた関渡津泊、市、宿などは、七八年の注(25)網野『無縁・公界・楽』において無縁の原理による「「無縁」の場」として描かれ、そののち八四年の「中世「芸能」の場とその特質」（『網野善彦著作集　第一一巻　芸能・身分・女性』岩波書店、二〇〇八年、初出一九八四年）では「芸能」との関係で捉え直されている。

(64) 注(31)石井論文。

(65) 戸田芳実「はしがき」（注(35)戸田編著）。

(66) 戸田芳実「東西交通」（『歴史と古道』人文書院、一九九二年、初出一九七八年）。

(67) 注(35)石井論文。注(35)入間田論文。

(68) 戸田芳実「古道踏査と中世史研究」（注(66)戸田著書、初出一九八一年）、村田修三「城跡調査と戦国史研究」（『日本史研究』二一一、一九八二年）、服部英雄「変貌する耕地景観と荘園史研究」（『歴史学研究』五〇一、一九八二年）、千々和到「金石文からみた中世の東国」（『歴史学研究』別冊特集《一九八一年度歴史学研究会大会報告》、一九八一年）。なお、服部の文章は一九八〇年大会の報告別冊特集ではなく、五〇一号に研究ノートとして掲載されているが、八〇年大会の中世史部会討論終了後におこなわれた特別報告であった（『歴史学研究』別冊特集《一九八〇年度歴史学研究会大会報告》一九八〇年、八

五頁）。

(69) 注(35)入間田論文三一六頁。

(70) 城郭・古道・荘園の調査手法とその研究上の意義を示す村田・戸田・服部論文のほか、金石文を取り上げる千々和報告も秩父の武蔵型板碑に注目するもので、そのような意味でローカルな小世界を描き出すものであった。この千々和報告は、「中世における地域と民衆」という題目のもとでのおこなわれたものだが、このような視点が、そののちの地域社会論につながっていくこととなる。

(71) なお、こののち戸田は一九八五年、この入間田の言及などを引用しながら、「その後、共通の意義と志向をもつ研究成果がとくに「社会史」の分野で続々と生み出され、学界を活気づけているのは周知の事実」と述べている（「文化財と環境問題」注(66)戸田著書、初出一九八五年、三〇五頁）。以後、戸田自身は「現場に立つ中世史学」「歩いて学ぶ歴史」への方向性を明確化していくこととなる。

(72) 湯浅治久「地方史研究と博物館をめぐって」（『地方史研究の展望』名著出版、二〇〇一年）。

(73) 注(34)勝俣論文二三九頁。

(74) 注(53)千々和論文。

(75) 鹿野政直「歴史意識の現在」（『「鳥島」は入っているか』岩波書店、一九八八年、初出一九八四年）。

(76) 勝俣鎮夫編『中世人の生活世界』（山川出版社、一九九六年）。このほか、たとえば大山喬平『日本中世のムラと神々』（岩波書店、二〇一二年）五二五頁には、「人々が生きた生活世界において機能していたムラ」という表現がある。

(77) 注(58)ルゴフ「歴史学と民族学の現在」三六頁。

(78) 本稿では、第三の問題に比して、第一・第二の問題については学際的な手法について言及が不十分であったが、たとえば黒田日出男『姿としぐさの中世史』（平凡社、一九八六年）・保立道久『中世の愛と従属』（平凡社、一九八六年）が絵巻などの絵画史料を積極的に使用していることを挙げておきたい。

(79) 注(12)石井論文一三二頁、一四〇～一四一頁。

(80) なお、石井進に関しては、地域に即して地名・伝承や現地調査などのさまざまな手法を駆使しつつ、「山の民・川の民」を描いた井上鋭夫の遺著に対して、「先生があと三〇年も生きておられれば、一向一揆ではなくて、かなり社会史的な地域

史」、「中央で問題になっている『部分』ではなくて、全体としての地方史」「を志向するようになったと思う」とする田中圭一の言を引用しながら「「全体としての」「社会史的な地域史」の構築」が「行きづまり的状況のいちじるしい最近の日本史学界の再生のための有力な方法のひとつであろう」と述べている点も注目される（石井「〈解説〉中世の山・川の民と境界」『石井進著作集　第一〇巻　中世史と考古学・民俗学』岩波書店、二〇〇五年、初出一九八一年）。他者の発言を引用するかたちでの言及ではあるものの、井上の実践してきた学問に「社会史」という用語を充てること自体を避けてはいないようである。

(81) 黒田俊雄「中世寺院史と社会生活史」（『黒田俊雄著作集　第三巻　顕密仏教と寺社勢力』法蔵館、一九九五年、初出一九八八年）。なお、黒田の『寺社勢力』（岩波書店、一九八〇年）はこのような黒田の関心を先駆的に示したものといえるだろうが、そのようにみなすことで、注(28)網野『日本中世の民衆像』、注(53)勝俣『一揆』、笠松宏至『徳政令』（岩波書店、一九八三年）という岩波新書黄版における日本中世史の名著四冊（佐藤雄基「勝俣鎮夫『一揆』を読む」『日本史研究』六八八、二〇一九年）を、同時代的な関心を一程度共有するものとして理解することも可能になるだろう。

(82) もちろん、論者によって重点を置く部分が異なり、強調したい点に相当の振れ幅があることは認めなければならない。

(83) 同じ時期に刊行された『週刊朝日百科日本の歴史』（朝日新聞社、一九八六～八八年）も、社会史の成果に基づく歴史像を提供することをねらっていたものであった（成田龍一「歴史叙述のなかの歴史意識」『現代歴史学の成果と課題　一九八〇―二〇〇〇年Ⅰ　歴史学における方法的展開』青木書店、二〇〇二年）。なお、注(29)で示した『社会史研究』も一九八八年に休刊しており、この頃をピークに流れが変わりつつあったことをみてとれる。

(84) 注(4)清水「習俗論としての社会史」は、「社会史は終わった」という評価もあることを紹介しつつも、笠松宏至・勝俣鎮夫らの習俗論を中心に把握すれば、八〇年代までの研究手法が九〇年代へも継承され、定着していることを確認できるとしているが、筆者としては、そこに挙げられた以上にこの時期の研究動向の影響を評価すべきなのではないかと考えている。

(85) 大隅和雄『信心の世界、遁世者の心』、笹本正治『異郷を結ぶ商人と職人』、田端泰子・細川涼一『女人、老人、子ども』（以上、中央公論新社、二〇〇二年）、網野善彦・横井清『都市と職能民の活動』（中央公論新社、二〇〇三年）。

(86) 石井進がこのシリーズの刊行に先立つ二〇〇一年に、そして網野善彦が二〇〇四年に逝去したことなどは、象徴的な意味を持つのであろう。

(87) 二木謙一『中世武家儀礼の研究』（吉川弘文館、一九八五年）。

(88) 盛本昌広「室町期における瓜献上の負担体系」（『日本中世の贈与と負担』校倉書房、一九九七年、初出一九九五年）、金子拓「室町時代における贈与交換」（『中世武家政権と政治秩序』吉川弘文館、一九九八年、初出一九九六年）、桜井英治「折紙銭と一五世紀の贈与経済」（『交換・権力・文化』みすず書房、二〇一七年、初出一九九六年）。

(89) 金子拓「室町殿をめぐる「御礼」参賀の成立」・「室町殿東寺御成のパースペクティヴ」（注(88)金子著書、初出一九九七年・一九九八年）、桜井英治「中世の贈与について」・「「御物」の経済」（注(88)桜井著書、初出一九九八年・二〇〇二年）など。

(90) 桜井英治『室町人の精神』（講談社、二〇〇九年、初出二〇〇一年）。

(91) 注(61)清水著書。

(92) 中世史全体を考えると、人類学とも関連しているこのような儀礼の問題を強く意識した論点として、いわゆる王権論を挙げることができるが、中世後期研究においては、王権に関する議論は今谷明『室町の王権』（中央公論新社、一九九〇年）・『戦国大名と天皇』（講談社、二〇〇一年、初出一九九二年）などへの批判から研究が進展した感が強く、儀礼自体が有する内的な世界への注目は少し遅れている。

(93) 髙橋昌明『武士の成立　武士団の創出』（東京大学出版会、一九九九年）。なお、この武士の成立という論点に関しては、都市的な側面や朝廷・中央権門に従属する側面と、在地領主的側面の双方を見据え、段階的に論じようとする元木泰雄の視角が重要である（元木『武士の成立』吉川弘文館、一九九四年）。

(94) 在京人の研究などが先駆的だが、北条氏をはじめとする有力御家人は在地領主ではなく「都市領主」と理解すべきとした入間田宣夫「守護・地頭と領主制」（『講座日本歴史三　中世一』東京大学出版会、一九八四年）の指摘のもつ意味が大きかろう。ほか、高橋慎一朗『中世の都市と武士』（吉川弘文館、一九九六年）、斉藤利男「「宿館」「宿所」と本宅」（『国立歴史民俗博物館研究報告』七八、一九九九年）など。

(95) 金子拓「二〇〇〇年の歴史学界　日本中世四」（『史学雑誌』一一〇―五、二〇〇一年）。

(96) 富田正弘「室町殿と天皇」（『日本史研究』三一九、一九八九年）。

(97) 豊後国田染荘：大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査概報　豊後国田染荘』（三冊、一九八三～一九八五年）・『豊後国田染荘の調査』（二冊、一九八六・一九八七年）、同館研究紀要の特集「荘園村落遺跡の調

査と保存」（二冊、一九八七・一九八八年）、丹波国大山荘：西紀・丹南町教育委員会編『丹波国大山荘現況調査報告』（五冊、一九八五～一九八九年）、大山喬平編『中世荘園の世界』（思文閣出版、一九九六年）、和泉国日根荘：『日根荘総合調査報告書』（一九九四年）、播磨国大部荘：『播磨国大部荘現況調査報告書』（七冊、一九九一～一九九八年）など。

このほか、石井進編『中世のムラ　景観は語りかける』（東京大学出版会、一九九五年）や、服部英雄『景観にさぐる中世』（新人物往来社、一九九五年）、海老沢衷『荘園公領制と中世村落』（校倉書房、二〇〇〇年）、水野章二『日本中世の村落と荘園制』（校倉書房、二〇〇〇年）などが挙げられる。

(98) とくに、播磨国の揖保川下流域に所在する複数の荘園の史料を駆使しながら、現状の水利景観と荘域の関係を指摘した小林基伸「平野部の水利と荘園」（国立歴史民俗博物館編『荘園絵図とその世界』一九九三年）が重要な論考である。

(99) ここでは代表的なものとして小山靖憲『中世村落と荘園絵図』（東京大学出版会、一九八七年）、黒田日出男『中世荘園絵図の解釈学』（東京大学出版会、二〇〇〇年）を挙げるにとどめておきたい。

(100) いま前掲の諸書のほかに具体的な研究を挙げる余裕はないが、榎原雅治が「近年は現地調査をふまえた荘園研究の進展によって」「生きた「地域」としての荘園の具象が空間論的にも明らかになってきている」（「シンポジウム　日本中世の地域社会」討論、榎原雅治の発言（『歴史学研究』六七四、一九九五年））と述べている点のみ、挙げておきたい。

(101) 石井進「回顧と展望　一九八一年の歴史学界――日本　中世一」（『石井進の世界　六　中世史へのいざない』山川出版社、二〇〇六年、初出一九八二年）。

(102) 鋤柄俊夫は、「中世都市遺跡をテーマに含んだ代表的な研究書」として『よみがえる中世』（平凡社、一九八八～九四年）、『中世の風景を読む』（新人物往来社、一九九四～九五年）という二つのシリーズと、帝京大学山梨文化財研究所でおこなわれたシンポジウムの記録の一つである『中世都市と商人職人』を挙げている（鋤柄『日本中世都市の見方・歩き方』昭和堂、二〇一〇年）。

(103) この間の研究の進展については、仁木宏『空間・公・共同体』（青木書店、一九九七年）など。

(104) 注(31)石井論文。

(105) 酒井紀美『日本中世の在地社会』（吉川弘文館、一九九九年）。ただし、酒井の関心自体は、本稿でいうところの場の系列に属する問題というよりは、人間集団の関係にあるようである。

(106) 以下に挙げる諸研究のほか、道や在地領主の城館に関する研究も関連するはずである。

(107) 大山喬平「荘園制」（『日本中世のムラと神々』岩波書店、二〇一二年、初出一九九三年）

(108) 榎原雅治「荘園公領総社と一国祭祀」・「中世後期の地域社会と村落祭祀」（『日本中世地域社会の構造』校倉書房、二〇〇〇年、初出一九九〇・一九九二年）。ほかにも同書には、宿の役割や山伏や御師の機能を指摘した研究があり、これらはすべて先駆的な指摘と評価される。

(109) 『中世都市研究　三　津・泊・宿』（新人物往来社、一九九六年）。とくに現代からの視角によってではなく、「彼らにとっての都市」という立場からこれらを抽出した桜井英治「市と都市」が重要である。そのほか、宿については、稲葉継陽「街道の宿と有徳人」（『戦国時代の荘園制と村落』校倉書房、一九九八年、初出一九九一・一九九二年）や、榎原雅治「地域社会における街道と宿の役割」（注(108)榎原著書、初出一九九二年）など。

(110) 石井進「おわりに」（『中世都市研究　七　都市の求心力』新人物往来社、二〇〇〇年）。

(111) 注(108)榎原著書一一～一二頁。榎原によれば、日本中世史で地域や地域社会という用語が頻繁に使用されるようになったのは、一九七九・八〇年頃だったのだという。

(112) 『歴史学研究』六七四、一九九五年。

(113) 歴史学研究会中世史部会運営委員会ワーキンググループ（稲葉継陽・菊池浩幸・釈迦堂光浩・田中克行）「「地域社会論」の視座と方法」（『歴史学研究』六七四、一九九五年）三頁。

(114) 注(113)「「地域社会論」の視座と方法」五頁。前後には、「「地域」は自らを襲う戦乱にも独自の対処をおこなっていた」（五頁）という表現もあり、「地域」という用語が社会集団の連合というようなニュアンスで使用されていたことは明らかであろう。

(115) このように、初期の地域社会研究に人民闘争史研究の影響が残っている点は注目される。

(116) 京都については「首都論」の名を冠して進められた研究（大村拓生『中世京都首都論』（吉川弘文館、二〇〇六年）、早島大祐『首都の経済と室町幕府』（吉川弘文館、二〇〇六年））と、後掲の荘園制論がこのような研究動向をよく示しているように思われる。鎌倉については、河野眞知郎『中世都市鎌倉』（講談社、一九九五年）など。

(117) 『日本史研究』四七六、二〇〇二年。

(118) 早島大祐「中世後期社会の展開と首都」（注(116)早島著書、二〇〇六年、初出二〇〇三年）、伊藤俊一「室町幕府と荘園制」（『年報中世史研究』二八、二〇〇三年、のち改稿し、『室町期荘園制の研究』（塙書房、二〇一〇年）に収録）、清水克行「荘園制と室町社会」（『歴史学研究』七九四、二〇〇四年）。

(119) 黒田俊雄「荘園制社会」（『黒田俊雄著作集　第五巻　中世荘園制論』法蔵館、一九九五年、初出一九六七年）、戸田芳実「王朝都市と荘園体制」（『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、一九九一年、初出一九七六年）など。なお、都市京都について、戸田芳実は「王朝都市」、黒田俊雄は「門閥都市」（「中世の国家と天皇」『黒田俊雄著作集　第一巻　権門体制論』法蔵館、一九九四年、初出一九六三年）、「権門体制都市」（「荘園制社会と仏教」『黒田俊雄著作集　第二巻　顕密体制論』法蔵館、一九九四年、初出一九六七年）と表現しており、これらを受けて美川圭は「権門都市」概念を提起している（美川「中世成立期の京都」『日本史研究』四七六、二〇〇二年）。

(120) 高橋典幸『鎌倉幕府軍制と御家人制』（吉川弘文館、二〇〇八年）、川端新『荘園制成立史の研究』（思文閣出版、二〇〇〇年）、高橋一樹『中世荘園制と鎌倉幕府』（塙書房、二〇〇四年）など）。

(121) 永原慶二「荘園制解体過程における南北朝内乱の位置」（『永原慶二著作選集　第三巻　日本中世社会構造の研究』吉川弘文館、二〇〇七年、初出一九六二年）。

(122) 宮川満「荘園制の解体」（『宮川満著作集　第一巻　荘園村落・農民の動向』第一書房、一九九八年、初出一九六三年）、網野善彦「荘園公領制の発展と転換」（『網野善彦著作集　第三巻　荘園公領制の構造』岩波書店、二〇〇八年、初出一九七四年）、『網野善彦著作集　第二巻　中世東寺と東寺領荘園』（岩波書店、二〇〇七年、初出一九七八年）。

(123) 黒川直則「守護領国制と荘園体制」（『日本史研究』五七、一九六一年）、大山喬平「室町末戦国初期の権力と農民」（『日本史研究』七九、一九六五年）。

(124) 大山喬平「戦国大名領下の荘園所領」（『国史論集』小葉田淳教授退官記念事業会、一九七〇年）・「公方年貢について」（『人文研究（大阪市立大学大学院文学研究科紀要）』二二、一九七一年）、藤木久志「荘園制解体期の村落と領主」（『戦国社会史論』東京大学出版会、一九七四年、初出一九七三年）。

(125) 工藤敬一「荘園制の展開」（『荘園制社会の基本構造』校倉書房、二〇〇二年、初出一九七五年）。

(126) 伊藤俊一は、守護が荘園制的な収取体系に依拠していた点を鋭く指摘した黒川直則が、かわりに国人領主を、荘園制を克服

する存在と位置づけていることについて批判している（注(123)黒川論文、黒川直則「中世後期の領主制について」（『日本史研究』六八、一九六三年）、注(118)伊藤著書六頁）。

(127) 井原今朝男「室町期東国本所領荘園の成立過程」・伊藤俊一「中世後期荘園制論の成果と課題」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇四、二〇〇三年。後者は改稿ののち注(118)伊藤著書に収録）。

(128) 湯浅治久『中世後期の地域と在地領主』（吉川弘文館、二〇〇二年）。なお、この佐々木大原氏は室町幕府のもとでは外様衆と呼ばれるグループに属していたが、清水克行が同じ佐々木一門で外様衆の佐々木鞍智氏について都市生活を論じたことも注目される（清水「ある室町幕府直臣の都市生活」注(61)清水著書、初出二〇〇二年）。従来、いわゆる御供衆や奉公衆（五番衆）が京都で室町殿に仕える存在であったことはよく知られていたが、外様衆のなかにもそのような存在が含まれることが改めて認識された意味は大きく、これにより湯浅が「在地領主」として取り上げた佐々木大原氏についても、そのような側面を有することが類推されうるになったわけである。

(129) 注(118)伊藤論文。なお、丹後国田数帳の分析は、外岡慎一郎が『宮津市史　通史編　上巻』（二〇〇二年）においておこなっているのが時系列的に先であるが、外岡と伊藤の見解には異なる点も多いため、注意が必要である。

(130) 榎原雅治「近年の中世前期荘園史研究にまなぶ」（『歴史評論』六五四、二〇〇四年）、岡野友彦「「応永の検注帳」と中世後期荘園制」（『歴史学研究』八〇七、二〇〇五年）。

(131) なお、小川弘和『古代・中世国家と領主支配』（吉川弘文館、一九九七年）、高橋典幸「荘園制と悪党」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇四、二〇〇三年）、高橋一樹「荘園制の変質と公武権力」（『歴史学研究』七九四、二〇〇四年）、清水亮「鎌倉期地頭領主の成立と荘園制」（『歴史評論』六七四、二〇〇六年）などに明らかなように、鎌倉幕府や地頭御家人を荘園制の構成要素とみる見解も前後して一般化し、これによって中世全体を荘園制概念で理解するという説が有力となった。

(132) 注(31)石井論文。